

よこはませいりょうそうごうこうこう
 神奈川・県立 **横浜清陵総合高校**

3年間を通じて学ぶ特色科目を軸に
 夢に向かってチャレンジする力を育てる

取材・文／永井ミカ



≫実践ノウハウ

- 学校経営理念に「組織の活性化」を掲げる
- 「産業社会と人間」をベースに発展的な特色科目を設定
- 事前学習→体験→まとめ→発表(共有)のサイクルで学習

2004年、神奈川県立高校再編計画により、清水ヶ丘高校と大岡高校の普通科2校が合併して誕生したのが県立横浜清陵総合高校。情報科学、生涯スポーツ、芸術表現、ライフデザイン、自然科学、人文国際の6系列をもつ単位制による総合学科高校である。

初代校長は神奈川県立高校で初の民間出身の石川裕二氏。開校当時から、C-I手法(コーポレート・アイデンティティ手法/企業の特徴や理念を体系的にまとめることにより組織を活性化する方法)を活用し、経営理念と教育目標を明確にしてきた。また、企業や大学など外部との連携を密にして、キャリア教育科目や総合選択科目、インターシップやボランティア活動などを充実。開校以来、生徒に「生き方」を考えさせ、「個性に適った進路選択を、より高いレベルで実現させる」ことを目指す「進学型」の総合学科として歩み続けている。

キャリア教育の軸は
 4つの特色科目

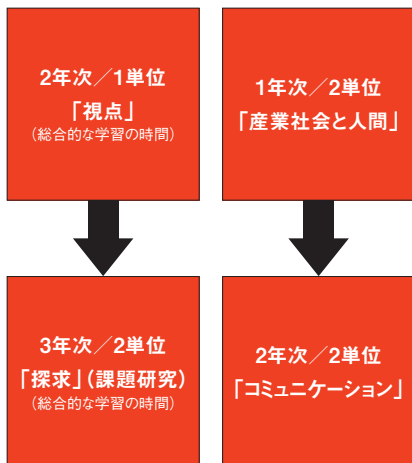
体験型学習と修得型学習で5つのキャリア能力を育て、各種ガイダンスや講演会などでサポートしていくというのが、同校のキャリア教育の全体像(図2)。なかでも、中心となるのが全員履修の4つの特色科目(図1)である。

1年次の「産業社会と人間」と3年次の「課題

研究」(同校では「探求」)は総合学科高校では必須科目であるが、さらに2年次で「コミュニケーション」と「視点」をプラス。「産業社会と人間」で職業や社会について体験的に学んだあと、「コミュニケーション」で積極的に社会とかわる姿勢やスキルを身につける。同時に2年次の「視点」で、小論文の書き方を学び、6系列をもとに物事に対する様々な視点を養ったうえで「探求」に向けたテーマ設定を行う。そして3年次の「探求」で、これまでの総合学科の学びの集大成としての課題研究を行うのである。

これらすべての学習は、事前学習→体験→まとめ→発表というサイクルで実施。だんだんレベルアップしながら繰り返していくことで、着実にコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力という、今、社会で求められる力がつくという仕組みだ。卒業生たちの力は、進学先や就職先で評価を得ている。

図1 4つの特色科目



>> School Data

総合学科 / 2004年創立
 生徒数 / 755人 (男子252人・女子503人)
 進路状況(2009年度実績) / 大学 47.6%・短大 14.4%・
 専門学校 21.8%・就職 7.8%・その他 8.4%
 神奈川県横浜市南区清水ヶ丘41
 TEL 045-242-1927
 URL http://www.yokohamaseiryosogo-ih.pen.kanagawa.ed.jp/

Process

立ち上げのプロセス

「育てたい生徒像」に忠実に
つくり上げていったカリキュラム

普通科2校の再編統合によって横浜清陵総合高校がスタートしたのは2004年。その前年の2003年に清水ヶ丘高校の中に開校準備室が設置された。横浜清陵総合高校の初代校長となる石川氏は専任主幹として、二代目校長となる岡崎先生は教頭として着任。そのほか2校から3名ずつの教員が準備委員として配属され、そのなかには、現在の総括教諭である長瀬右文先生の姿もあった。

当時、開校準備室は校内で「金魚鉢」と呼ばれていたという。ガラス張りの室内で連日のディスカッション。みんなが常に金魚のように口をばくばくさせていたからだ。組織のペクトルをひとつの方向にまとめるために、Cの手法を導入。「どんな生徒を育てたいか」「今の社会ではどんな力が求められるのか」といったことを繰り返し話し合い、学校経営理念や教育目標(図2)を全員で策定し明確にしていった。石川氏が30年以上銀行に勤めるなかで感じていた、学校と社会の人材ミスマッチへの問題意識なども大いに反映されたという。

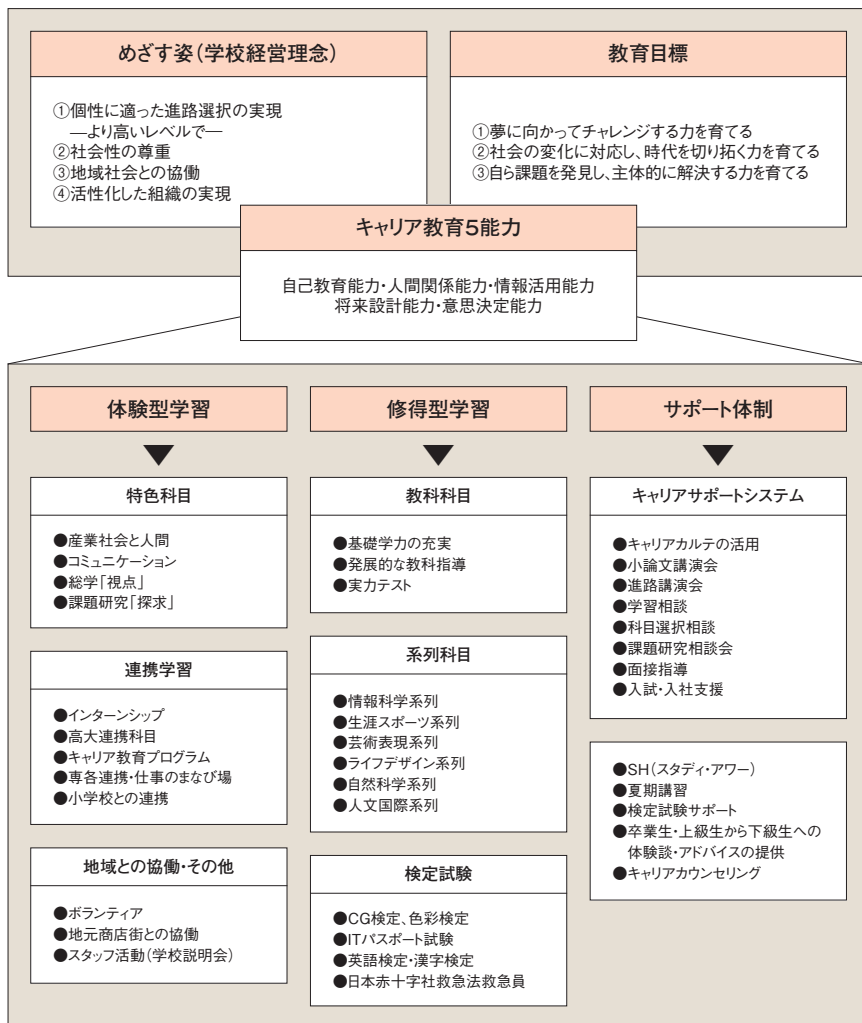
なかでも、教育目標の最初に掲げられている「夢に向かってチャレンジする力を育てる」という

項目は、「夢チャレ」というキャッチフレーズで生徒にも親しまれている。「夢をもちなさい」というだけでなく、「力を育てる」という部分が大切。本当に社会で役立つ力をつけさせたいという思いが、開校準備の頃からありました」と岡崎校長。そして、その力をつけるためにはどうすればいいのかということから、具体的な教育内容が詰められていった。

その際、特に参考にしたのが、1993年に文

部省(当時)から出された『高等学校教育の改革の推進について(第四次報告)』総合学科について。要約すると、進路を自覚させるメニューを用意することや、主体的に学べるよう体験学習を取り入れることなどが書かれている。これを忠実に具体化していった結果、4つの特色科目をメインにしたキャリア教育の流れができた。途中、事業所見学など一部のメニューについては、統合前から小規模な実践も行いつつ、手探り、手

図2 キャリア教育全体図





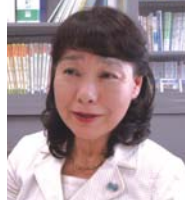
キャリアガイダンスグループ
総括教諭
池田 玲先生



総合学科推進グループ
総括教諭
長瀬右文先生



教頭
高木 亮先生



校長
岡崎珠苗先生

作りで、カリキュラムを組み立てていった。でき上がったものは、完全なオリジナルである。

そして開校。試行錯誤しながら、担任、副担任のチームミーティングで1年次の「産業社会と人間」がスタートした。長瀬先生はいう。「休み時間や生徒の作業時間中に、よく廊下に出て教員同士でやり方を確認していました。特色科目については全員が初心者。何か疑問や問題があるたびに徹底的に情報交換を行うようにしていました」。その後、生徒の実情や卒業生アンケートの結果などに合わせてマイナーチェンジはあったものの、開校7年目の現在もベースの部分はほとんど変わっていない。

Close up ①

4つの特色科目

2つの科目で、社会性と

コミュニケーション力をアップ

4つの特色科目(それぞれの内容は図3)のうち、最初の科目は1年次の「産業社会と人間」で、6つの単元から成り立つ。第1単元では宿泊研修、第2単元では社会人講話、第3単元では事業所見学...というように、単元ごとに体験学習を用意。そして、それぞれが事前指導→体験→まとめ→報告・発表という流れになっている。必ず発表をさせるのは、プレゼンテーションの力をつけるとともに情報を共有するといふねらいもある。「ここで行う事業所見学では、どんな職業を

見学するかが問題なのではありません。それよりも、働く人に触れ、仕事の場に身を置く。そして、いろいろな職業について情報を共有し、お互いが感じたことを発表しあう。そこに自分の生き方を考えるいいヒントがたくさんあり、職業観や勤労観も養われていくのだと思います」と岡崎校長はいう。

続く2年次の「コミュニケーション」は「産業社会と人間」の発展科目。社会とのかかわりをより深めるための科目で、コミュニケーションスキルや日本語のトレーニングを経て、インタビュー実習を行う。インタビューの対象は誰でもいいが、複数の生徒が同じ人にインタビューはできないというのガルール。将来つきたいと思っている職業や興味のある分野に関連する人に、生徒自身からアポイントメントをとる。なかには著名人を候補として挙げる生徒もあり、2回、3回と断られることも珍しくないが、最終的には全員がインタビューを実施。記録したものは報告書にまとめ、相手に授業記録集への掲載許可もとる。そして、最後は発表会を実施。話し手はマイク1本で前に立ち原稿を見ずに3分間のスピーチをするのである。

4つの特色科目のなかで、開校当時から内容が最も変わっていないのがこの「コミュニケーション」。「新指導要領を読んでも、今、言語力が問われています。『コミュニケーション』のような授業は、この時代、本当に必要なのでは」と岡崎校長。岡崎校長は、英語教員として授業をしている頃から、

「日本の生徒には外国語以前に母国語で自分の考えを述べるという訓練が足りない」という思いがあり、きちんとコミュニケーションのスキルを教える授業ができないものかと考えていた。1年間、この授業を受けることで、生徒たちは大きく成長し、自信をつけるそらだ。

慎重にテーマを選び

じっくり取り組む課題研究

2年次で履修するもうひとつの特色科目は「視点」。その名のとおり、6系列を軸にして、物事に対する様々な視点を養うための学習である。具体的には、前期は、小論文をどのようにして書くかを学び、後期は3年次から始まる「探求」(課題研究)のテーマ探しやその準備を行う。

生徒には、各自で作って学んできた時間割もふまえ、将来の進路選択・実現にもつながるようなテーマを選んでほしい。そこで、「視点」の授業では、先輩の3年次生を招きパネルディスカッションを実施。探求のテーマをどのようにして決めたか、その後進路への影響はどうだったか、また具体的な探求の進め方などを語ってもらう。これは2年次生のモチベーションを上げるのに非常に効果的だといふ。

そして3年次からは「探求」がスタート。設定したテーマにおよそ10カ月をかけて取り組んでいくもので、総合学科の学びの集大成になる。文献やインターネットを使った調べ学習だけでなく、

図3 特色科目の年間授業計画

●視点(2年次)

前期	1	オリエンテーション①(「視点」について)
	2	小論文講座①(小論文とは)
	3~6	小論文講座②~⑤(チャレンジノート)
	7	視点講座①(6系列の各教員による視点獲得講座)
	8	視点講座小論文①
	9	進路を考える①(入試についてなど)
	10	進路を考える②(サマワーク計画作成)
後期	11~12	視点講座小論文②③
	1	オリエンテーション②(「探求」について)
	2	ブレ探求活動(相談活動と調べ活動を通して、興味・関心や進路と結びつけて探求テーマを明確にする活動)①
	3~4	ブレ探求活動②③(テーマ調べ・相談活動等)
	5~7	ブレ探求活動④⑤⑥(事前学習・相談活動等)
	8	3年生の話を聞く
	9~11	ブレ探求活動⑦⑧⑨(事前学習・相談活動等)
後期	12~14	発表会準備①②③
	15~17	ブレ探求発表会①②予備日 特色科目発表会

●産業社会と人間(1年次)

前期	第1単元 総合学科で産人を学ぶ	なぜ「産人」を学ぶのか、改めて自分を理解することと併せながら、学習内容や方法を理解する。	産人ガイダンス/宿泊研修事前指導/宿泊研修1日目(ウォークラリー)/宿泊研修2日目(グループワーク・卒業生に聞く)/第1単元のまとめ・第2・3単元の説明
	第2単元 職業と産業を知る	社会で活躍している人たちの話を聞き、様々な職業と産業を知ることにより、自分にふさわしい職業選択をしていく準備をする。	事前指導・分野別下調べ・事業所見学希望調査/社会人講話・まとめ・礼状・発表準備/ポスター作成・発表準備/クラス内発表・第2単元のまとめ
	第3単元 事業所見学	興味をもった分野の働く現場を見学・体験することにより、職業と仕事に対する認識を深め、将来の職業選択の足がかりにする。	事業所見学事前指導/下調べ・質問内容の検討/事業所別事前指導/事業所見学/振り返り・礼状・発表準備/科目選択の説明・報告会の説明と準備/事業所見学報告会
後期	第4単元 総合学科で学ぶ	これまでの学習内容を生かし、進路実現のための時間割を確認。また、上級生の体験談や発表ビデオから、様々な学習の機会があることを理解し、自分を高めるための工夫をする。	後期オリエンテーション・前期の振り返り/総合学科の学びを知る(インターンシップ・講座など)/総合学科卒業生から話を聞く/(福祉施設訪問の説明と希望調査)総合学科マイプラン/集団での問題解決技法・総合学科マイプラン
	第5単元 社会を知る	様々な他者とのかわりを通して、ともに社会を作っていく姿勢を養う。	福祉施設訪問事前指導(講話)/福祉施設訪問事前指導/福祉施設訪問/振り返り・礼状
	第6単元 産人を振り返る	1年間の学習をまとめ、それを発表することを通して、次年度以降の総合学科の学びを充実したものにする。	先輩の発表を見る・1年間の振り返り・発表グループ分け/発表企画提出/発表会準備/発表会準備・リハーサル/振り返り・2年次の特色科目に向けて/産人発表会/記録集原稿提出/特色科目発表会

●課題研究「探求」(3年次)

前期	1	オリエンテーション 全体・HB
	2~8	探求活動
	9~10	中間発表①②
	夏休み	サマアクション
	11	探求活動
	12	中間論文提出(3200字)
後期	13~17	探求活動
	18	発表準備
	19~20	HB発表会①②
	21	探求活動
	22	最終論文提出(4800字)
	23	年次発表会
	24	論文修正 提出
	25	授業アンケート 振り返り作文

●コミュニケーション(2年次)

前期	基礎	ガイダンス	科目の目標の理解・1年間の流れ
		日本語トレーニング・コミュニケーションスキル	仲間づくり①②/話の聞き方伝え方①②/コミュニケーションにおける日本語の重要性/日常の日本語トレーニング/話の聞き方伝え方③/聞き書きトレーニング【基礎】~聞き書きから伝達へ/話の聞き方伝え方④/聞き書きトレーニング【発展】~今後の学習の進め方
	実践	インタビューガイダンス	インタビュー・実習の意義と課題~取材先の開拓
		「インタビュー」導入	メディアから学ぶインタビュー・「取材先希望届」配布/質問の仕方/取材コンテの作成と活用・仲間インタビュー/取材のまとめ方/アポイントの取り方・アポイントの原稿作成/依頼文の書き方/特別講師を招いて「取材届」提出
後期	表現	「インタビュー」準備	アポ取り体験記・依頼文章作成/取材下調べ・取材コンテ作成/インタビュー台本作成/インタビューのマナー・リハーサル
		「インタビュー」実践	社会人へのインタビュー実習
	科目のまとめ	「インタビュー」実習のまとめ	礼状作成・取材のまとめ/インタビュー体験記/報告書下書き原稿作成・原稿送付/実習報告会準備・報告書作成/実習報告会
		コミュニケーションスキル	自己を知るためのコミュニケーションスキルトレーニング/自己表現のためのコミュニケーションスキルトレーニング



「コミュニケーション」でスキルを学ぶ授業。写真は聞き方トレーニングの様子。



クラス内で「探求」の成果を報告。代表者は年次の発表会でも発表を行う。

フィールドで取材をするよう指導しているのも特徴だ。企業のお客さま電話相談に電話をかけた

り、調査対象の店に訪れる人に声をかけてインタビューをしたり、役所の担当部署に話を聞きにいったり：生徒たちが臆することなく電話をかけたり外に出ていったりができるのは、これまでの学びの成果のおかげだ。そしてでき上がったものは、ここでも最終的に全員が発表する。

年度末は全年次参加の「特色科目発表会」が開かれ、自作ムービーや劇、クイズ形式など趣向を凝らした発表も。昨年はおよそ30名の来賓からも高い評価を受けてた。

Close up ② チームワーク

経営理念にも掲げられている

「組織の活性化」

さて、同校の教職員は非常に多忙だ。系列が6つに分かれているため選択科目の数が多く、ひとりの教員の担当科目数は平均5から6。それに加えて特色科目の充実ぶり。そして地域連携も盛んで、神奈川経済同友会を窓口としたインターンシップや、大学の講師と同校の教員が共同で通年の授業を行う学校設定科目などがある。また、生徒個々の進路指導に関しては全教職員で取り組むことが当たり前となっており、例えば、就職希望の生徒はほぼすべての教員と計数十回に及ぶ面談の練習をするという。「コミュニケー

ション能力はあきらかに身につけ、志望動機もきれいに書けます。けれども、建て前の受け答えではなく、とことんつきつめて本当の気持ちを自分の言葉として言えるようにならないと、企業の担当者には通じませんから」とキャリアガイダンス部・総括教諭の池田玲先生。ちなみに希望者の就職率は、例年100%を達成している。

忙しいなかでも校内は活気にあふれている。「横浜清陵は、新しいことにアンテナを張りながら、新しい学力観に基づいてキャリア教育をしている学校です。こういう学校では特に、職員がいかに元氣かということが大切。先生方のチームワークのよさも我が校の特徴です」と岡崎校長。開校当初からの学校経営理念には「組織の活性化」が掲げられているが、理念のなかに教職員について明文化されているのは珍しい例。この「組織の活性化」を、同校の教職員が常に意識してきたという。

着任2年目の高木亮教頭先生は「先生や生徒はもちろん、保護者も熱心。また転任した先生がよく訪ねてくることにも驚きました」という。「学校全体から、いい学校をつくらうという気持ちで伝わってくるんです」。転任した教員は、学習発表会に訪れ、在校生を熱心に指導していくこともある。

一方で、開校当初からの教職員が減るとともに、理念や目標が薄れていくのではないかとこの心配もつきものだ。けれども校長先生をはじめとする先生方は最近、「生徒たちが引き継いで

くれている」と感じる人が多いという。同校では、特色科目のなかで、在籍する先輩や卒業生が下級生にアドバイスをする機会がいくつあるが、キャリア教育の内容を理解したうえで真摯に語ってくれるそう。中学生向け説明会など生徒の学校経営への参加も盛んで、卒業生へ講演会などへのボランティア参加を呼びかけたところ、多くが登録してくれた。なかには「横浜清陵の先生になりたい」と将来を語る生徒もいる。横浜清陵総合高校は、巣立っていった生徒や教職員、関係者が愛着をもてる学校となっているのだ。

「特色科目を実践するなかで、どのようにすれば生徒が成長するかという方法がわかってきました」と長瀬先生。生徒の成長という点で非常に効果を挙げている特色科目を、形骸化しないよう予防しつつ、より学びの内容を深め進路選択・実現につなげていくことがこれからの課題である。

また、現在新たに構想しているのは、学力向上への取り組み。特に言語活動には、様々な教科で力を入れたいという。「特色科目を通じて教科横断的な取り組みができたことは大きな成果だと感じています。こうした組織的な取り組みを、特色科目だけでなく、教科・科目の学力向上につなげていきたいと考えています」と岡崎先生。教科・科目での教員個々の取り組みはすでに始まっており、これからの進化が期待される。